

「ドラッカーと現代社会」

総合政策学部 糟谷 崇

2009年、ドラッカー生誕100年を記念して、多くの雑誌の特集が組まれたり、ドラッカー関連本が発刊されたりした。そのなかでも特に異彩を放っていたものとして、映画やアニメにもなった「もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら」があげられる。この作品は、高校野球という日本人の多くに親しみのあるテーマをもちいて、ドラッカーのマネジメントがどういうものかということについて、わかりやすく解説したものだ。

「もしドラ」に代表されるように、ドラッカーといえば「マネジメントの父」というイメージが強い。ほとんどの人はドラッカーといえば企業のマネジメントやビジネスについて、多くのアイデアを提案した人間というイメージだろう。

実際にドラッカーの様々なマネジメントスキルを発案し、それを世間に広めた功績は偉大だ。そんな偉大な哲人にたいして、駆け出しの研究者である自分がコメントするのもおこがましいが、それでもやっぱりマネジメントの父としてのドラッカーに僕なんかは違和感を覚える。それは、しょうがない、どうしても理論研究が中心の僕にとっては「『科学的経営経済学』などは存在しない。業績を上げる方法は、実は誰でもが承知している」という彼の言葉に反発したくなるのだから（実践だけでは学べない大切なこともきっとあると僕は信じている）。

さて、そんなひねくれモノの僕がドラッカーを紹介するときに、使うフレーズは「マネジメントの父」ではなく「現代社会の偉大な予言者」だ。ナチスの反感を買い、アメリカに移住した彼が、発表した「経済人の終わり」は、まさに現代社会に対する強い彼の思いが現れたものだ。全体主義の時代が終わり、個人の経済的自由と平等が達成される日がくることを、あの時代（1939年）に主張したことが、どれだけのすごいことか。

そして、ドラッカーが92歳（2002年）のときに出版された「ネクスト・ソサエティ」は、知識社会としての現代社会を予言したものだ。1. 知識は資金よりも容易に移動するがゆえに、いかなる境界もない社会となる。2. 万人に教育の機会が与えられるがゆえに、上方への移動が自由な社会となる。3. 万人が生産手段としての知識を手に入れ、しかも万人が勝てるわけではないがゆえに、成功と失敗の並存する社会となる。こうした考え方は、間違いなく、彼が言うように、いま勉強中の方々が、これから生き、働き、活躍し、貢献していくことになる社会を理解するうえで助けになるものだと思う。

< 今回、紹介した書籍 >

「もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら」

岩崎夏海著、ダイヤモンド社、2009.

「経済人の終わり：全体主義はなぜ生まれたか」

P.F.ドラッカー著、上田惇生訳、ダイヤモンド社、1997.

「ネクスト・ソサエティ：歴史が見たことのない未来がはじまる」

P.F.ドラッカー著、上田惇生訳、ダイヤモンド社、2002.